

Title	RICHARD BRADLEY, The past in prehistoric societies
Sub Title	
Author	櫻井, 準也(Sakurai, Junya)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.163(343)- 175(355)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

RICHARD BRADLEY ; The Past in Prehistoric Societies.
Routledge. 2002

桜井準也

現代の考古学者は遺跡や遺物を当然のように歴史の中に位置づけようとするが、この行為は極めて近代的な行為である。「過去」の遺跡や遺物に出会うことはいつの時代にもあったことであり、その際に民衆は奇異な形の遺物を歴史ではなく、説話やその土地に伝わる伝説に結びつけて語ってきた。しかし、わが国の考古学では文献に「過去」の遺跡や遺物の記載があっても、それを積極的に当時の人々の遺跡や遺物の認識という文脈で捉えることまれであった(拙稿二〇〇一「遺跡・遺物観の系譜」『史学』第七〇巻二号)。

これに対し、ヨーロッパの考古学界では、一九九〇年代になるとアパデュライ編集の『モノの社会生活』(The Social Life of Things. Cambridge University Press. 1986)

の影響もあり、先史学者を中心に地域に残る巨石記念物や遺跡から出土する遺物に対し、ライフヒストリー(生活史) life history あるいはバイオグラフィー cultural biography という観点から研究を行うようになった。そして、九〇年代後半からは長期間にわたって地域景観を構成してきた巨石記念物に対する後世の人々による再利用、転用、破壊などのあり方をめぐる論考が増え、雑誌『ワールド・アーケオロジー』(World Archaeology)』誌三〇巻(一九九八)において特集「過去における過去：古代記念物の再利用(The Past in the Past: The Reuse of Ancient Monument)」が組まれた。ヨーロッパではこのような文脈での遺跡や遺物の研究が考古学における新たな研究の趨勢の一つとなっている。

本稿で紹介するのは、その研究における中心的存在であり、『ワールド・アーケオロジ』誌三〇巻の編者の一人でもあるリチャード・ブラッドリーの著作『先史社会における過去』(*The Past in Prehistoric Societies*. Routledge. 2002)である。著者のブラッドリーはイギリス・リーディング大学教授であり、先史時代の社会組織や景観考古学、ロックアートなどを中心に研究を行っており、既に『ロックアートと大西洋ヨーロッパの先史時代』(*Rock Art and the Prehistory of Atlantic Europe*. 1997)‘

『記念物の意味』*The Significance of Monuments*. Routledge. 1998)‘『自然景観の考古学』(*An Archaeology of Natural Place*. Routledge. 2000)を発表している。

まず、章ごとに内容を簡単にまとめてみたい。

第一章はイントロダクションである。「ダーウインのクリスマスダイナー」と題して、新種の動物をダイナーで食べてから標本として記録するというチャールズ・ダーウインの野外調査の方法が考古学の方法に類似しているという指摘から始まる。そして、一九世紀においては先史時代のイメージが民族誌と重なり、「野蛮」という軽蔑的なイメージがつきまとい、一九六〇・七〇年代のプロセス考古学における通文化比較においても同

様の傾向がみられたとしている。これに対し、ブラッドリーは先史時代が「非文明」や「遠い昔」を意味するだけでなく、当時の時間概念について語ることができることを強調している。そして、歴史学者のブローデルは事件史、中程度の時間の経済サイクル、長期間の人口学的変化や自然環境変化を区別したが、同様の区分は先史考古学にも適用可能であり、過去の人々の習慣に支配される日々の行動と公の時間を証拠づける記念物や同様の構造物で表現される長期継続性を区別することが重要であると述べている。

そして、ブラッドリーはゲルの研究を参照しながら、時間の概念には「過去」・「現在」・「未来」で表現される主観的時間、そして特定の時点の「以前」あるいは「以後」の区別という時間感覚が存在することを指摘している (Gell. A. 1992 *The Anthropology of Time*. Berg)。本書で中心的に論じられている記念物の構築に関しては、その構築物の「未来」を想像することは難しいとしても先史時代人は「過去」を認識していること、考古学者が実践しているように後者の方法によって記念物を連続的に並べることができるが、前者のような時間の主観的理

解の問題が重要であることをブラッドリーは強調してい

る。そして、無文字社会において集団の起源や歴史を記憶するには、過去のイベントがあつた場所や受け継いだ構造物や物質文化の維持が重要な役割を果たしているとしている。つまり、社会的記憶には身体的実践を通じて起こるもの、特定の世界観を永続させるように意図された記念物の構築を通じて得られるものがあり、物質資料を扱う考古学にとって記憶は地域景観を構成する記念物の維持あるいは変更、さらにはモノの意図的な破壊、すなわち生産から廃棄に至る通常のサイクルからの離脱といった行為によって維持あるいは生成されるというのである。

このように、本章では先史考古学研究における時間概念や社会的記憶の維持・生成の問題をあげながら、ヨーロッパ先史社会において巨石記念物を中心とする過去の遺構や遺物がどのように扱われてきたか、つまり、ヨーロッパ先史社会における過去の理解のあり方がいかなるものであつたかを具体的な事例に基づいて考察することが本書の目的であることが明示されている。

第二章では、最初に特定の共同体を結びつけるものが「共通の起源」を共有する意識であり、アエネーイスなどの叙事詩にみられる英雄的先祖の旅、北ヨーロッパの

起源神話や王家の系譜、さらには北西アマゾンの民族誌などを引き合いに出しながら、ヨーロッパ新石器時代の発掘事例から社会的記憶の生成について論じている。

具体的に取り上げられたのがリニア土器文化のロングハウスである。ロングハウスは家屋自身が歴史的記録であり、そこに住んでいた民族のライフコースをたどるとされている。そして、居住者が亡くなるなどの理由でロングハウスは移動するが、放棄された家屋は互いに同じ直線上にあり、居住地域を横切つてほぼ等間隔に分布している。そのことから放棄された建物の位置が記憶された、つまり、遺跡に残された居住地の形態がその居住者の歴史を記録し、社会的記憶を表象するとされている。

この方向軸については、卓越風の方向に関連する、あるいは海岸線や彼らの世界観に影響されているという指摘もあるが、ブラッドリーはエーゲ海からのウミキクガイの長距離移動の証拠や入口の方向が以前に居住していた地域の方向を向いているといった仮説を紹介しながら大西洋海岸地域のリニア土器文化の居住地と西地中海の先祖との繋がりを指摘している。その後、ロングハウスが使用されなくなり、遺跡内に塚が構築されるようになる、地域景観を構成する塚の方向は最も近い「過去」に

構築されたロングハウスに従うが、これらの事例が共通にもつものは共有された「過去」であるとブラッドリーは述べている。

これに対し、ヨーロッパ先史時代の構築物には塚を土で被覆することで遺体を見えなくし、生きている人々から切り離すシスト（石室）、逆にそれが見える方法で「過去」を記憶するメンヒル（単一立石）が存在する。

さらに、墓道付石室墓は長期間使用され、人々が死者の遺体を訪問することができると外部世界と繋がった施設である。ブラッドリーは、これらの構築物を詳細に検討することにより多くの情報が読み取れると述べている。例えば、装飾のあるメンヒルの一部が再利用され石室の屋根へ組み込まれたり、再利用された接合破片が三キロメートル離れた地点から出土するという事例が存在する。また、ブルターニュ地方の最大の立石のあるル・グラン・メニールブリゼではメンヒルが一直線に並ぶという現象がみられる。そこでは、モノリスは打ち倒されていたものの本来の位置に近接して残っていたのに対し、メンヒルはすべて持ち去られていた。メンヒルがメガリス（巨石墓）の石室の中で直立していたり、逆にメンヒルが引き倒され、破壊されるといった状況もみられるが、

これは「聖像破壊」に等しく、二つの異なった信仰システム間の闘争であるとブラッドリーは解釈している。また、石室墓の中の個々の彫像メンヒルの取り扱いは死体が扱われるのと同じ手続きに従っており、これらの彫像を破壊したり、見える所から移動させる行為によって新たな伝統が創造され、それを通じて特定の個人の偉業が想起されると述べている。

これに対し、再利用が容易な墓道付石室墓は過去との関係をまったく変えることになった。ブラッドリーは墓道付石室墓の役割の一つが生者と死者の間の連続的な接触、つまり追葬、再配置、骨の移動の容認にあり、過去の人々の遺物は巨石記念物を通じて広がる儀礼パターンの多様性の中で混ぜ合わせられ、社会的記憶を定着させることになったと指摘している。このことを示す事例として南アルプス地方の共同墓地、プチ・シャスール遺跡の調査成果があげられている。ここでは、紀元前二千九百年から二千七百年にメガリスが構築され、紀元前二千四百年頃に一連の記念物が構築されている。これは巨大なシストの形をとり、構築にあたって彫刻のある破片が再利用され、人骨は部屋から移動させられている。さらに、紀元前二千百年頃に同じ破片が塚の前の小さな祭壇

を建造する際に再利用されるが、このプロセスは記念物
再利用の儀礼的サイクルを示す典型的な事例として紹介
されている。

このように、ブラッドリーは土で被覆されることで遺
体が見えないシスト、景観を構成して過去を記憶する役
割を担うメンヒル、さらに追葬などの内部の再利用が可
能な墓道付石室墓の特徴を提示しながら、メンヒルの再
利用あるいは破壊の状況や墓道付石室墓の利用プロセス
について検討している。そして、それらの行為が死者へ
の顕彰や血統の主張へと繋がっていくこと、墓道付石室
墓については生者と死者との接触によって多様な儀礼が
行われ、それが社会的記憶を定着させる重要な役割を果
たしたとしている。

第三章でブラッドリーは遺物に目を向けている。まず、
彼自身の書齋にある絵画、書架の本、林檎の木、新石器
時代の斧、中世の彫刻、最近の発掘品が自らのライフヒ
ストリーの一部を構成し、遺物（モノ）も人間と同じよ
うに歴史を持つていと述べている。しかし、遺物に対
するこのような評価を阻止する多くの考古学者は、「過
去」の遺物が再利用されることはないと思ひ込んだり、
集団を構成する遺物が異なった年代の資料で構成される

可能性を考慮しないとしている。そして、遺物（モノ）
の意味が個々の歴史に依存する具体的な事例として青銅
器時代の斧や剣をあげ、形態や精巧さ、さらには使用痕
や研ぎ直しの痕跡などの諸特徴から戦闘用と儀礼用に区
別される剣の来歴について言及している。

次に、ブラッドリーは青銅器時代の住居について論じ
ている。オランダの中期・後期青銅器時代のエルプ遺跡
では、家屋が一直線に並び主要な墓と同じ軸に従ってい
ること、多くの建物が共同墓地に近接していることから
連続する世代が隣接する「過去」の居住地を認識してい
たとしている。また、これらの集落は移動を繰り返した
が、これらの「放浪する」居住地は周辺農地の肥沃度や
家屋の寿命という機能的解釈ではなく、そこに生きた
人々のライフサイクルに関わると指摘している。さらに、
イングランドのダートムア遺跡を紹介し、イギリスで
記録された最も広大で古いとされる境界システムについ
て論じながら、個々の居住地の「過去」の記憶の影響に
ついて議論するには、いかに周辺の景観が変化したかも
考慮しなければならぬと述べている。つまり、ある世
代の生活が彼らの先祖の目にみえる足跡によって影響さ
れ、それぞれ「過去」の廃墟から生じた連続性によって

居住地を理解することができるといっているのである。

第四章では、記念物を時間軸で捉えた場合、未来の世代にとって記念物がどのような存在であるかをフランツ・カフカが一九一七年に発表した『万里の長城』を例にあげながら議論を展開している。万里の長城は当初、北方の外敵から守ることが意図されていたが、部分ごとに構築され、長い休止期間が存在したことから、後の時代に構築した人々はなぜそれが構築されたのか知らなかったという。そして、万里の長城は防御のための作品ではなく過去の偉業として捉える記念碑的解釈が可能であり、このようなメディアが永続するほど周りの人々は自分の意見を持つようになり、記念物の形態やその解釈が変化することにより計画の「折衷」が生じるとブラッドリーは述べている。

次に、スコットランドのカーサスの長方形囲い地の破壊と移動のサイクルが、そこに存在した記憶との結合を通して再構築されたこと、具体的には柱穴の痕跡を残すことで構築物の使用方法を理解させたというトーマスの議論 (Thomas, J. 2000 The identity of place in Neolithic Britain : examples from south-west Scotland. In A. Ritchie (ed.), *Neolithic Orkney in its European Context*,

McDonald Institute for Archaeological Research.) や木材のサークルが同じ配列のモノリス (石柱) によって取って代わられていることから、人体のように木材は腐るというアナロジーを通じて生者の活動が死者と関連していたというパーカー・ピアソンらの議論 (Parker Pearson, M. and Ramilisonina 1998 Stonehenge for the ancestors: the stones pass on the message, *Antiquity* 72) を紹介しながら、ブラッドリーはこれらの記念物が一定の歴史を持ち、その変化が定められていた道順に沿うと指摘している。また、記念物は石材選択や配列において計画性があるとして、記念物の縁石の高さで等級をつけ、モノリスが形や色で選択されているという北スコットランドのクラヴァケルンの事例、過去との関係を払拭した耕作活動にも関わらず木柱が石柱に継承され、尾根に沿ってレイアウトされながら一定方向に弧を描く北イタリアのアオスタ遺跡の事例を紹介している。また、記念物が最も集中しているフランスの南ブルターニュのカルナック周辺地域でも記念物群には一定の直線列がみられ、石の配列が組織化され、特徴のある景観は立石の直立によって強調されるといふ計画性がみられるという。

このように、記念物の構築者は未来の世代の過去を理

解の仕方を指示しようと試みてきたが、なぜ記念物が構築されたか、あるいは彼らが後の世代に伝えた思想についてのコンセンサスは存在しなかったとブラッドリーは述べている。そして、記念物に対する新しい解釈が生じるに従って初期の意味が失われ、記念物は新しい解釈に適応するように修正され、古いものに取って代わったとされている。つまり、記念物はそれぞれ生命を帯びており、製作者の意図を超えてこれらのプロジェクトが進行していったのである。

第五章では、過去が後世にどのように再生されるかが論じられている。まず、四世紀に北イタリアの教会の床下からレッドオーカーが塗られた二体の旧石器時代人骨が出土し、それが皇帝ネロに殺された殉教者と解釈されたという逸話が紹介されている (Haldane. J. B. S. 1985 *God-makers. In J. B. S. Haldane, On Being the Right Size and Other Essays. Oxford University Press.*)。過去の人々は常に生き残った過去に遭遇するものであり、文書、地名、口承伝統、あるいは彼らの経験から様々な「誤読」が生じるというのである。ブラッドリーは、キリスト教社会では異教徒の遺物を破壊し、それらを取り込もうとするが、その際に自己解釈や再解釈がなされるとし、

その具体例としてメガリスやロックアートの事例が紹介されている。

まず、メガリスはその近くに教会があつたり、共同墓地の中に存在することが多く、祭壇として再利用されたリチャペルとして残されることも多いという。メンヒルも野外の十字架に改造される場合がある。これらのメガリスの再利用の事例をみると、中世初期において新石器時代の構築物が認識されていたことは明らかであるが、いくつかのキリスト教のシンボルが先史時代のものに類似している点も重要であり、大西洋沿岸の先史時代のロックアートが中世のイメージで解釈されているという指摘もなされている。また、同じような状況は中世だけでなく、スペインのイベリア地方の上部旧石器時代の壁画のある洞窟にローマ時代の彫刻が存在し、北フランスでもメガリスが再利用され、遺物が埋葬施設や寺院、さらには洞窟や岩陰と関連することからローマ時代には神聖な場所として認識されていたことが指摘されている。ブラッドリーは、このような従来の考古学では説明されなかつた様々な現象に対して一般モデルを構築する必要性を訴え、そのキー概念となるのが「解釈」、「対立」、「正統性」の概念であるとしている。

後半では長期間にわたる先史時代遺跡の再利用について考察している。まず、北東ドイツのメガリスに対してポスト・プロセス考古学の枠組みから新石器時代から紀元千四百年に至るメガリスのライフヒストリーについて論じたホルトフの研究などが紹介されている (Holfort, C. J. 1998 *The Life-Histories of Megaliths in Mecklenburg-Vorpommer (Germany). World Archaeology* vol. 30)。ホルトフによると、メガリスは新石器時代に発達するが、前期青銅器時代にも重要視され、一端閉鎖されたのち後期青銅器時代・前期鉄器時代・移住期に再利用される。その後、ローマ時代以降には活動がみられなくなるが、中世には共同墓地として再利用される傾向が認められるという。同様の傾向は北フランスやイギリス低地においても認められ、ここでは「過去の権威」を伴う新たな祭祀形態が発達したが、その典型的な遺跡がアイルランド王家の遺跡であるタラ遺跡であるとブラッドリーは指摘している。タラ遺跡では王家の時代であった鉄器時代の遺構が新石器時代や青銅器時代の遺構の軸方向に沿うなど「過去」が尊重され、王家の資産は先史時代の記念物関連の遺物で形成されることによって権力を得ているという。そして、紀元千年頃までは王家は遺

跡との繋がりを強調（あるいは捏造）することにより地位を得て、遺跡が放棄されてからはそれに関連した伝説が記述されるようになったとしている。

最終章である第六章では、まずチャールズ・ダーウィンと一九世紀のイギリスの考古学者コルト・ホアーを引き合いに出しながら文献史料の存在しない先史時代の時間概念について論じられている。そこでブラッドリーは過去から現在への一連の時間の流れの中で捉えられる近代の商業経済的時間概念に対して、①神の無時間な歴史（神話や伝説）、②先史時代の遺物や記念物にみられる時間概念など他の時間尺度の存在を指摘している。そして、後者の時間概念を理解するためには、コルト・ホアーが行ったような徹底したデータの収集と体系づけ、遺物の図示といったモノの記録が基礎になると述べている。それが過去の考古学界に定着しなかった理由としてブラッドリーは、物質文化が中心的役割を占める理論が構築されなかったことや先史考古学者が文献への接近を拒んだことをあげている。そして、その理論的中核となるのが過去の遺跡や遺物の再利用やリサイクルの問題であることが再度強調されている。

コルト・ホアーの祖父がイギリスのストアヘッドに造

営した庭園（「時間の庭園」）には古代の彫像、中世の十字架、異教徒の寺院、近代の村などの建築物や過去の遺物が集められていた。ブラッドリーはこの庭園が「過去」がどのように再生産され再使用されたかをコルト・ホアーに認識させることになったと述べるとともに、この状況は先史時代においてもあてはまるものであり、この著書はそのことを語ろうとしたものであると結んでい

る。

以上がブラッドリーの著作『先史社会における過去』(The Past in Prehistoric Societies. Routledge. 2002) の概要である。本書は、従来の考古学の中で検討されることになかった先史時代の時間概念について取り上げ、ヨーロッパの発掘調査事例を中心に過去への遺構や遺物の再利用や転用という観点から先史社会における「過去」について論じたものである。以下で章ごとに評価を試みてみたい。

まず、第一章では考古学における時間概念の問題を検討することの重要性を訴えている。確かに、現代の考古学者にとって時間とは科学的な年代測定法によって測定可能で、「過去」から「未来」へと直線的に配列される

近代的な時間が想定されており、先史考古学では石器や土器の製作過程における行動復元のような短期的な時間を対象とする研究と遺物や遺構の型式変化からマクロな環境変動までの長期的な時間を対象とする研究に区分することができると述べている。そして、時間の概念には主観的理解による時間と特定の時点の以前あるいは以後の区別という時間感覚が存在すると述べている点については、後者が遺物の年代の前後関係決定する相対編年において実践される時間感覚であるのに対し、前者の「過去」・「現在」・「未来」という主観的時間感覚でとらえることが本書で扱われる様々な遺跡の事例を解釈してゆく際の前提になっている。しかし、先史時代人に「過去」・「現在」・「未来」という時間感覚が存在したという指摘についてはまだまだ議論の余地がある。この点についてはブラッドリーも「過去」の認識については盛んに議論しているが「未来」という時間感覚についてはあまり積極的に論じてはいない。いずれにしろ、先史時代においてこのような議論を可能にするのが様々な活動を行う場や構造物、さらには物質文化（モノ）の存在であるというブラッドリーの指摘は正しい。そして、社会的記憶はモノに関連して生成あるいは維持されるものであり、それを

具体的に検討する材料として地域景観を構成する記念物の構築・維持・変更（転用や意図的な破壊）などの行為の痕跡に注目したことも十分納得できる。

次に、第二章では、集団や共同体の起源に対する意識の問題が論じられている。ロングハウスの事例分析から家屋自身が歴史的記録であり、そこに住んでいた民族のライフコースをたどるといふ指摘は興味深いものであり、わが国でも住居の廃絶の理由に居住者の死亡や疫病の流行などをあげる研究者も多い。しかし、過去の建物の位置などの記憶に関する議論はわが国ではほとんどなされていない。また、エーゲ海からのウミキクガイの長距離移動から住居の入口の方向が過去に居住していた地域の方向を向いているといった議論を紹介しているが、遺構の分布や方向を検討して、その民族の起源地と結びつける仮説は魅力的なものではあるものの、ヨーロッパ全体にわたる広範囲の民族移動の問題をわずかな考古資料で語ることも自体が粗い議論であると言わざるをえない。

これに対し、ヨーロッパの先史時代には塚を土で被覆することで遺体を見えなくするシステム、景観を構成して過去を記憶するメンヒル、追葬など内部の再利用が可能なる墓道付石室墓の諸特徴をまとめたうえで、メンヒルの

分布状況、再利用、破壊などの行為に意味があるとする指摘は興味深いものである。特に、彫像を破壊したり、移動させたりする行為によって特定の個人の偉業が想起されるといふ指摘や追葬などの生者と死者の間の連続的な接触によって多様な儀礼が行われることにより、社会的記憶を定着させるという指摘は興味深い。このような視点、つまり巨石記念物の転用や再利用といった観点からの研究は、わが国でも古墳の転用や再利用という観点での研究が一九六〇年代より行われている（石部正志一九六一「歴史時代における古墳の再利用」『同志社考古』第一号など）。その中でも間壁葎子は古墳再利用の実態を検討することで、当時の社会が古墳をいかに認識していたかを知る手がかりとなると述べたうえで、石室を再利用した動機として自己の出自を主張したり、古墓やその周辺地の所有権を主張するための手段であったとしている（間壁葎子一九八二「八・九世紀の古墳再利用について」『水野恭一郎先生頌寿記念日本宗教学史論叢』国書刊行会など）。この指摘はブラッドリーのいう血統の主張という問題に繋がるものであり、このような議論がわが国では二〇年以上前から存在していたことは高く評価される。そして、一九八〇年代後半以降になる

と、古代人や中世人が古墳をどのように再利用、転用、

破壊したかという問題に関する論考が多くみられるようになった(向坂綱二一九八五「古墳の再利用」『転機』創刊号、奥村清一郎一九八六「長岡京の造営によって壊された古墳」『長岡京古文化論叢』同朋舎、土井光一郎一九九二「中世墓に対する一考察」『花園史学』一三三号、石尾和仁一九九九「中世社会と「古墳」」『真朱』三三三号、斎藤弘一九九九「中世墓における古墳の利用」『ホミニズ』第二巻、渡邊邦雄一九九九「畿内における八・九世紀の古墳祭祀」『古代文化』五一巻一・一二号、渡邊邦雄二〇〇〇「律令墓制における古墳の再利用」『考古学雑誌』八五巻四号など)。また、後世の人々の「過去」の遺物の取り扱いに関する論考も近年になって増え(角南聡一郎・藤村俊一九九八「転用された円筒埴輪」『秋篠・山陵遺跡』奈良大学文学部考古学研究室、阿部友寿二〇〇五「縄文時代後晩期の再利用品と配石遺構の関係性」『神奈川考古』四一号など)、地域に残る伝説と遺跡や遺物の関係を探る試みもなされている(拙稿一九九九「伝説の生成・補強と縄文土器」『メタ・アーケオロジ』創刊号、拙稿二〇〇四「遺物の創造力」慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室編『時空をこえた対話—三

田の考古学—』六一書房)。

第三章では、遺跡や遺物も人間と同じように歴史を持つていることが指摘されている。このうち、遺物(モノ)については従来の考古学ではライフヒストリーやライフサイクルという生産から廃棄へ至る流れが強調されるが、再利用や転用、さらには破壊といった生産者が想定しなかった行為の背景にある意識を読み取ることが重要である。また、ブラッドリーは遺物(モノ)自体が歴史をもっているだけでなく、住居や居住地も同様に歴史をもっているとしているが、これの議論は先史時代の「土地の記憶」の問題に繋がるものである。しかし、家屋の配列や墓との位置関係から「過去」の居住地を記憶していたとする点については、状況証拠の一つを提示したに過ぎず仮説の域を出ない。ただし、その時代の景観を構成していた石列やケルンの存在によって、これらの場所が記憶されたという指摘については蓋然性が高く、わが国でも長い間地上に露出していたと考えられる縄文時代の配石墓やストーンサークルなどについて同様の観点から検討することが可能である。

第四章では、さらに議論を発展させて記念物の構築者は「未来」の世代に「過去」を理解の仕方を指示しよう

としたが、構築の理由や彼らの思想を伝達することはできなかつたという問題を提示している。後世になると製作者の意図を超えて記念物に対する新しい解釈が生じたり、新たな解釈が付加されるという指摘はモノと人との関係を探る物質文化研究の側面においても重要な視点である。

第五章では、「過去」がどのように後世の人々によって再生されるかという点が論じられている。過去の人々は常に「過去」と遭遇しており、それに対し様々な解釈あるいは「誤読」を生じさせるという指摘は、第四章と同様に本書で展開される議論の前提となるものである。ブラッドリーは、このような現象を読み解くためのキーワードとして「解釈」、「対立」、「正統性」の概念をあげたが、ここで重要なのは「過去」と遭遇した人々の「主体」が明瞭に登場してくることである。その内容は宗教的な「対立」であったり、自らの出自や権力に対する「正統性」の主張であるが、本書では遺跡や遺物利用における宗教性や政治性について古代や中世の事例を紹介する際に若干触れているものの、本書が先史時代を扱っているためか中心的な論点にはなっていない。また、考古学者としてブラッドリーに共感できる部分は「過去」

の遺跡や遺物の取り扱いという文脈で遺跡や遺物を観察・記録することに対する現代の考古学者の無理解を訴えている点である。「過去」の遺跡や遺物の再利用やリサイクルに関する研究が進展しない弊害については、わが国においても後の時代の土層や遺構から出土する「過去」の考古資料が重要視されず、整理作業システムの中で「攪乱層出土資料」という不当な扱いを受ける状況が存在することをかつて指摘したことがある(拙稿二〇〇一「遺跡・遺物観の系譜」『史学』第七〇巻二号)。

最後に、ブラッドリーは第六章で一九世紀のイギリスの考古学者コルト・ホアーを紹介しながら先史時代の時間概念や彼の育った環境の中に古代の彫像や中世の十字架などが存在した庭園があり、ホアーが「過去」がどのように再生産され再利用されるかを知る環境にあったことを論じている。この問題は、考古学者の「過去」の捉え方が考古学者の育ちや研究環境によって左右されることを意味する。このうち研究環境の影響に関しては、わが国の明治期から昭和初期にかけての考古学について考えるとわかりやすい。当時は現在のように豊富な発掘事例を用いて研究することは不可能であり、発掘資料だけでなく江戸時代の研究者が収集した資料や寺社に伝世・

保管されている資料などを収集・記録したり、文献史料に登場する考古資料について検討することが主な研究の方法であった。そのため、古代や中世の人々、あるいは近世の学者や庶民が遺跡や遺物をどのように認識していたかという問題も意識されていた（中谷治宇二郎一九二八「石器に伴う説話の発展」『民族』三卷三号、斎藤忠一九三二「古墳の祟り」『ドルメン』一卷八号、斎藤忠一九三二「石器に付加せられた呪術的意義」『人類学雑誌』四七卷一二号、中谷治宇二郎一九三五『日本先史学序史』岩波書店、中谷治宇二郎一九三五「神いくさと山のかみ」『ドルメン』四卷七号など）。しかし、戦後の日本考古学では急激に増加する発掘資料を用いた遺物の実証的研究が主流となった。ここでは縄文時代や弥生時代の社会や生活を科学的な方法を用いて復元することが研究の中心となり、客観的に表現しづらい先史時代の時間概念や「過去」の遺跡や遺物に対する認識といった観点での研究は考古学の主流から取り残されていった。この傾向は欧米においても同様であったことが本書から窺うことができる。

本書では先史時代における時間概念を主要テーマとして、遺跡や遺物の再利用・転用・破壊といった遺跡に残

された痕跡から当時の人々が「過去」をどのように認識していたかという問題について、具体的な発掘事例を用いながら論じられている。また、本書で扱っている内容は単に「過去」や「未来」という時間概念に関わるだけではなく、自らの権威を高めたり、血統の正当性を主張するための遺跡や遺物の政治的利用、あるいは墳墓の忌避や破壊といった当時の人々の心性の解明に繋がる問題を含んでいる。本書が先史考古学研究に限らず考古学研究全般にとつて新たな視点を提示するものであることは間違いないが、このような研究が浸透し、評価されるためにはまず何よりも考古学者や発掘調査担当者の意識改革、そして研究史の再構築が必要である。